



光星学院が6点目を奪い、喜びに沸くスタンドの生徒たち

光星VS野辺西

「精神的に乗り越えた」「みんな頑張った」

姉妹校決戦に感慨

両校、健闘たたえ合う

26日に青森市宮球場で行われた全国高校野球選手権青森大会決勝は、光星学院が野辺西を9-1で下し、8年ぶりに夏の甲子園出場を決めた。姉妹校同士の間で決勝で対戦するのは初めてとあって、スタンドの応援は熱を帯びた。試合終了後、両校の応援団は自校はもちろん、相手校にも惜しみない拍手を送った。【本記1画】

県大会決勝を戦つたのは15回目の常連校・光星学院。片や、初の決勝進出となった野辺西。野辺西の齋藤弘実校長は「実は大会前、光星から『26日には(応援の生徒の移動用に)バスを貸してくれ』と言われ、了解していた

んです。試合ごとに強くなり、ここまで勝ち進んでくれるとは、グラウンドで喜びきびした動きを見せる選手たちに目を細めた。

日ごろの仲はともかく、今日ばかりは一枚だけの甲子園切符を奪い合う敵同士。前年度まで野辺西で事務主任を務めた今春、光星学院に隣接する八戸短大付属幼稚園に異動した柴崎典子さん(46)は、野辺西の応援席に陣取って少し複雑な表情。

「どちらが勝つてもうれしいが、今日はこちらに来ました。準々決勝で光星を破った2年前の夏のように、今日も何かが起こるかもしれない」と見守った。

県外出身の選手が多い光星学院。スタンドには時折、関西弁も飛び交った。松本憲信選手(3年)の父で光星学院硬式野球部関西交母会長の憲二さん(46)は「大阪弁」は「東日本

大震災後、練習や精神面で心配していたが、乗り越えてくれた」と、選手たちの力強いプレーをたたえた。

対照的に野辺西は過半数が県内選手。9回を1人で投げ抜いた、平川市出身の主戦・小林大誠選手(3年)の父史明さん(55)は、幾度となく訪れたピンチでも「ゆっくりでいよ」「どどん攻め」と励ましの声援を送り続けた。

試合終了と同時に、光星学院の応援団は大歓声に沸いた。代打で安打を放った川崎貴之

選手(3年)の父純孝さん(44)は同校野球部OB。「息子の代で春夏連続甲子園出場という素晴らしい歴史を築けるなんて。感謝という言葉しか出てこない」と感慨深げだった。

野辺西の応援団からは「ありがとう光星の大エールが送られた。1回戦からスタンドで応援し続けてきた、野辺西1年の木戸ゆりかさん(16)は「みんな頑張ったと思う。来年も応援に来るので、ぜひ甲子園に行ってほしい」と涙を拭いた。(兼平昌寛、永野悠太)